



和久傳女将
桑村綾

くわむら・あや 昭和15年京都府生まれ。高校卒業後家事手伝い、証券会社勤務を経て39年に老舗旅館・和久傳に嫁ぐ。丹後・峰山の衰退した和久傳を立て直し、62年には京都・高台寺に店を構える。現在は料亭3店舗、和煮などの「おもたせ」は東京、名古屋を含めて8店舗開業している。

半世紀以上、命が息づく本物の森づくりの研究、実践を続ける植物生態学者の宮脇昭氏。

その植樹活動は国内外千五百か所、本数にして三千万本にのぼるといふ。そして実践を続ける中で、人にも植物にも共通する普遍の法則を発見した。氏の考えに共鳴し、自ら森づくりの先頭に立つ和久傳女将の桑村綾さんもまた、倒産しかかった旅館を立て直す中で、人や企業のあるべき姿を見つめてきた。お二人が掘んだ人生の大則とは。

大自然の摂理に学ぶ ——森を蘇らせよ、人間も生きる——

●対談——宮脇昭&桑村綾

——本物の森づくりを目指す 和久傳の植樹活動

桑村 先生、しばらくでございます。
宮脇 相変わらず世界や国内を飛び回っておりましてね。一昨日まで内モンゴルで植樹の指導をして帰ってきたところなんです。年取った方から若い方まで、たくさん集まっていたので、皆楽しく植樹をしました。おもしろいもので、言葉は通じなくても、国境や民族、宗教を超えて、お互いに感じるものがあるんです。

桑村 それは素晴らしい植樹でしたね。宮脇先生は植物生態学の世界的権威でいらつしやいますから、なかなか席が温まる暇もございませんでしよう？

宮脇 私はこれまで千五百か所に三千万本以上の植樹をしてきました。ただたったの七十九歳でございますから、あと三十年は皆さんと一緒に木を植えるつもりでいます。

桑村さんのお付き合いは昨年からです。私、私は桑村さんとお会いするのいつも楽しみにしているんです。私は森でも人間でも、本物以外は相手にしません。桑村さんと何度もお会いする中で、「ああこの人は本物だな」という思いを強くしています。



横浜国立大学名誉教授
国際生態学センター研究部長
宮脇昭

みやわき・あきら 昭和3年岡山県生まれ。27年旧制広島文理科大学（現広島大学）卒業。33年から35年までドイツ国立植生園研究所研究員。横浜国立大学講師、助教授を経て、48年教授に。平成5年から同大学名誉教授。4年紫綬褒章受章。12年勲三等瑞宝章受章。17年ブループラネット賞受賞。著書、編著に『日本植生誌』（全10巻）『植物と人間』『鎮守の森』『木を植えよ』、その他多数。

というのも、普通、経営者などでは多いんですが、Xデーを決めないで、二年、三年はすぐに経つてしまう。口約束のままという人も多い。ところが桑村さんはお会いして半年ほどで植樹祭を実行に移された。それも全国から千六百人の方を、お世辞にも交通の便がよいとはいえない京丹後の山の中に集められましたからね。

桑村 先生には、その陣頭指揮を執っていたいただきました。人口一万人の小さな町ですから、最初は八百人を集めるのもやっとなと思

っていたんです。またそれだけの食事を準備するのも大変ですし、消極的になつていたのですが、先生から「最初からできないというのではなくて、どうしたらそれができるかを考えなさい」と言っていたいただきましたね。ふたを開けたら千六百人の皆さんが集まっていた。五十六種類、一万八千本の木を植えました。滞りなく全員にお食事やお茶も出せて、無事に植樹祭を終えることができたんです。本当に先生には感謝しています。

宮脇 あの土地は京丹後市の工業団地の一角で、桑村さんはご自身が経営

される料亭・和久傳の食品工房を建設するために購入されたのでしたね。

桑村 はい。そのことを少しお話しさせていただけますと、私たちは京丹後でかつて老舗旅館を経営しておりました。しかし近年、丹後縮細が衰微の一途を辿り、町の人口も減つて料理旅館として守っていけないところまでましました。廃業し、借金して京都に進出したわけです。

その時、「和久傳は町の象徴だから、ぜひ残ってほしい」というので、約二千人の方が署名をしてくださったんです。私はその時お一人おひとりに「必